

34 東洋文庫所蔵『重修政和經史証類備用本草』について

清水 信子

公益財団法人東洋文庫／二松学舎大学文学部・東アジア学術総合研究所

【証類本草】宋代、医家の唐慎微はそれまでに出版された本草書や医方書を引用して『經史証類備急本草』、通称『証類本草』をまとめた。この書は刊行には至らず、後に増訂、校正などを経た各種の『証類本草』が刊行される。

まず1108年(大観2)、艾晟が増訂した『經史証類大観本草』(以下略『大観本草』)が刊行され、1116年(政和6)、その『大観本草』を曹孝忠が徽宗の勅命により校正した『政和新修經史証類備用本草』(以下略『政和本草』)が刊行された。また金の1249年には張存恵による校訂と宋の寇宗奭の『本草衍義』を加えた『重修政和經史証類備用本草』(以下略『重修政和本草』)が刊行された。該本は1468年(成化4)には重刊され、朝鮮ではその成化重刊本を基にして『大観本草』から序(「經史証類大観本草序」)と大徳6年(1302)の刊記を加えた銅活字版が刊行された。さらに明万暦5年(1577)には王大猷と程文繡の校正による『重刊經史証類大本草』(以下略『証類大本草』)が刊行された。今回紹介する東洋文庫所蔵本は『重修政和本草』朝鮮銅活字版で、江戸時代後期の医家で考証学者、書誌学者の渋江抽斎(1805-1884)の旧蔵本である。

抽斎は、弟子の森立之(1807-1885)らと編した『経籍訪古志』の中で『大観本草』『政和本草』『重修政和本草』について言及し、『重修政和本草』朝鮮銅活字版については、「……蓋明代据成化本而重雕者不一而足。皆非佳刻。唯朝鮮国活字擺印本能存其旧」と、成化本による重刊本はいくつもあり、みな良いものではないが、ただ銅活字本のみ旧版を保っている、と記している。

【東洋文庫所蔵本】東洋文庫所蔵本は、抽斎の旧蔵であったが、それは次いで万葉集の研究で知られる国学者木村正辞(1827-1913)に移り、その後鉱物学者で書誌学者の和田維四郎(1856-1920)を経て、三菱第3代社長の岩崎久彌(1865-1955)の所蔵となり、岩崎文庫として今に至る。なお、和田は岩崎文庫の蒐集に大きく貢献した人物である。

眉上には、各種『証類本草』との校異を中心とした藍筆、墨筆、朱筆の書入れがある。それらの書写者は明記されておらず、各筆異なる人物によるものと思われる。書入れは朱筆が最も多く、そのやや縦長で整然とした筆跡は、抽斎、木村正辞のいずれか、もしくは両者によるものが混在しているとみられる。校異書入れには「医心方」「本草和名」「綱目」「千金翼方」「大本」とあり、校本として丹波康頼撰『医心方』、深根輔仁撰『本草和名』、明李時珍撰『本草綱目』、唐孫思邈撰『千金翼方』、そして『証類本草』諸本から『証類大本草』が用いられている。それらの筆者が抽斎、木村のいずれにしても、その校異からは当時の各校本諸本の伝本、定本などの状況、関心が知られることとして、書誌学的にも興味深く、今後さらに詳査していく。

なお、本書は、本学術大会の特別展ともなる2023年5月31(水)から東洋文庫ミュージアムで開催される「東アジアの医療文化—東洋文庫の善本でたどる」(仮)に出展される予定である。